

諏訪神社周辺遺跡の発掘調査

株式会社島田組 文化財事業本部調査部



野津 旭

遺跡要項

遺跡名：諏訪神社周辺遺跡

調査指導：東広島市教育委員会

調査担当：株式会社 島田組

所在地：東広島市西条東北町196番2の一部、196番3、197番11、197番12

調査原因：住宅団地建設工事（道路部分）

調査面積：97.5㎡

調査期間：令和5年4月5日～4月25日

調査成果

今回調査した諏訪神社周辺遺跡は、諏訪神社を中心とした丘陵上に位置する集落遺跡の南東端部分にあたります。

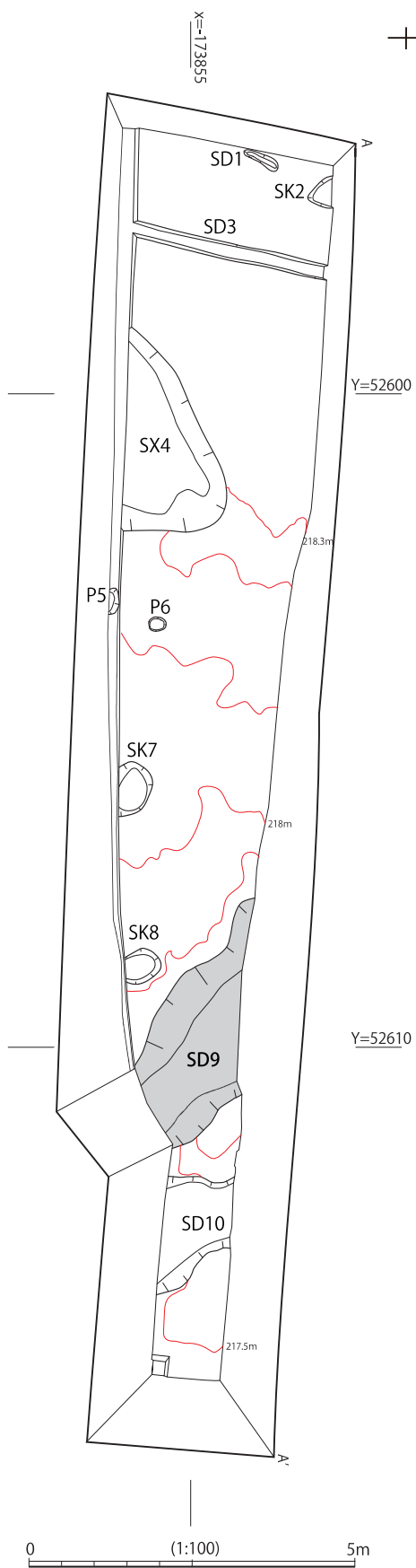
周辺では過去に、平成6（1994）年、平成10（1998）年、平成29（2017）年に発掘調査がおこなわれ弥生時代中期後半から弥生時代終末期の遺構が多数確認されています。

本発掘調査は、道路工事に伴うものであったため、限られた非常に狭い範囲での調査でしたが、弥生時代中期を中心とする良好な一括資料を得ることができました。特にSD9からは多くの弥生土器が出土し、その多くは施文・器形などから弥生時代中期（IV-2 様式）のものと考えられ、分銅形土製品も含まれていました。集落に関連するような遺構は検出されませんでした。SD9は諏訪神社周辺遺跡の東側の推定範囲ラインと重なることから、この遺跡の広がりを考える上での一助となる貴重な成果を追加したものと考えています。

今後さらなる調査の増加によって、諏訪神社周辺遺跡の全容とその詳細な構造が明らかになることを期待します。

遺構名	グリッド	検出面	法量 (m)			出土遺物	備考
			長軸	短軸	深さ		
SD1	1A	地山面	0.56	0.12	0.03		
SK2	1A	地山面	0.53	0.36	0.16		
SD3	1A	地山面	3.03～	0.26	0.34		竹材埋設による暗渠
SX4	1A・2A	地山面	1.26	0.65	0.19	須恵器・青磁片	
P5	2A	地山面	0.07	0.03	0.13		
P6	2A	地山面	0.26	0.202	0.03		
SK7	2A	地山面	0.81	0.44	0.11		
SK8	2A	地山面	0.54	0.50	0.05	須恵器片	
SD9	2A・3A	地山面	0.9	1.11	0.21	弥生土器	自然流路か
SD10	3A	地山面	1.13	1.38	0.26		自然流路か

遺構一覧表



調査区全体平面図



諏訪神社周辺遺跡調査地点（東から）



調査区遺構完掘状況（西から）

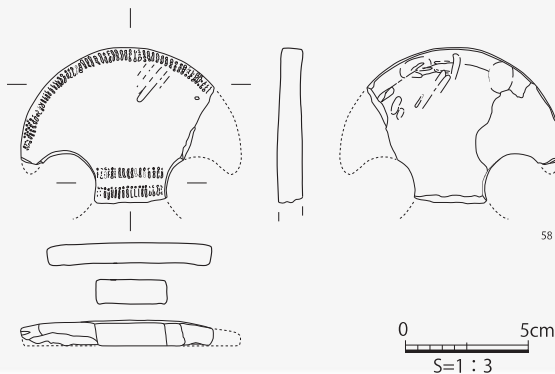
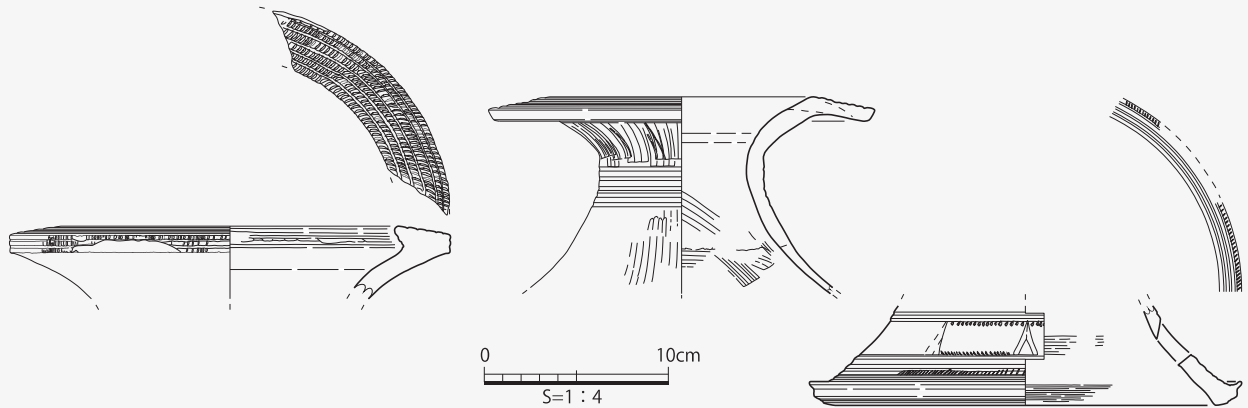


SD9遺物出土状況（南東から）

分銅型土製品（SD9出土）



SD9出土遺物（一部）



分銅型土製品とは？

分銅型土製品は、弥生時代中期から後期（約2200年前から1900年前）にかけて、主に瀬戸内海周辺や山陰地方で使われた遺物です。

これらは長方形または円形をした薄い土の板で、中央部がくびれており、はかりのおもりのような形をしています。

長さ5-10cm前後のものが多く、左右の端や上の面にいくつかの小さな穴が開いていることがよくあります。形は、イチヨウの葉をくっつけた形だけでなく、愛媛県や山口県あたりでは、上下の形が四角形になっています。表面には、不思議な文様が櫛のような道具などで描かれていて、赤く塗られることもあります。

これらの遺物は、日用品ではなく、何かの祭りの道具と考えられています。

安芸国分寺周辺遺跡の発掘調査

東広島市教育委員会生涯学習部文化課調査係
（東広島市出土文化財管理センター）津田 真琴

調査日：2023（令和5年）年8月1日～8月8日

所在地：東広島市西条町吉行字尼寺

調査面積：140 m²

調査主体：東広島市教育委員会 文化課 調査係 調査原因：住宅団地造成工事

調査概要とみつかった遺構

安芸国分寺周辺遺跡は、史跡安芸国分寺跡を中心とした低丘陵上に広がる弥生時代から中世にかけての複合的な遺跡です。

今回は住宅団地道路部分の小規模な発掘調査で、奈良・平安時代の遺物と考えられる布目瓦、須恵器、土師質土器の破片が出土しています。削平を受けていたため遺構の残りはあまり良くないですが、柱穴状ピットや溝状遺構、性格不明の土坑などを検出しました。

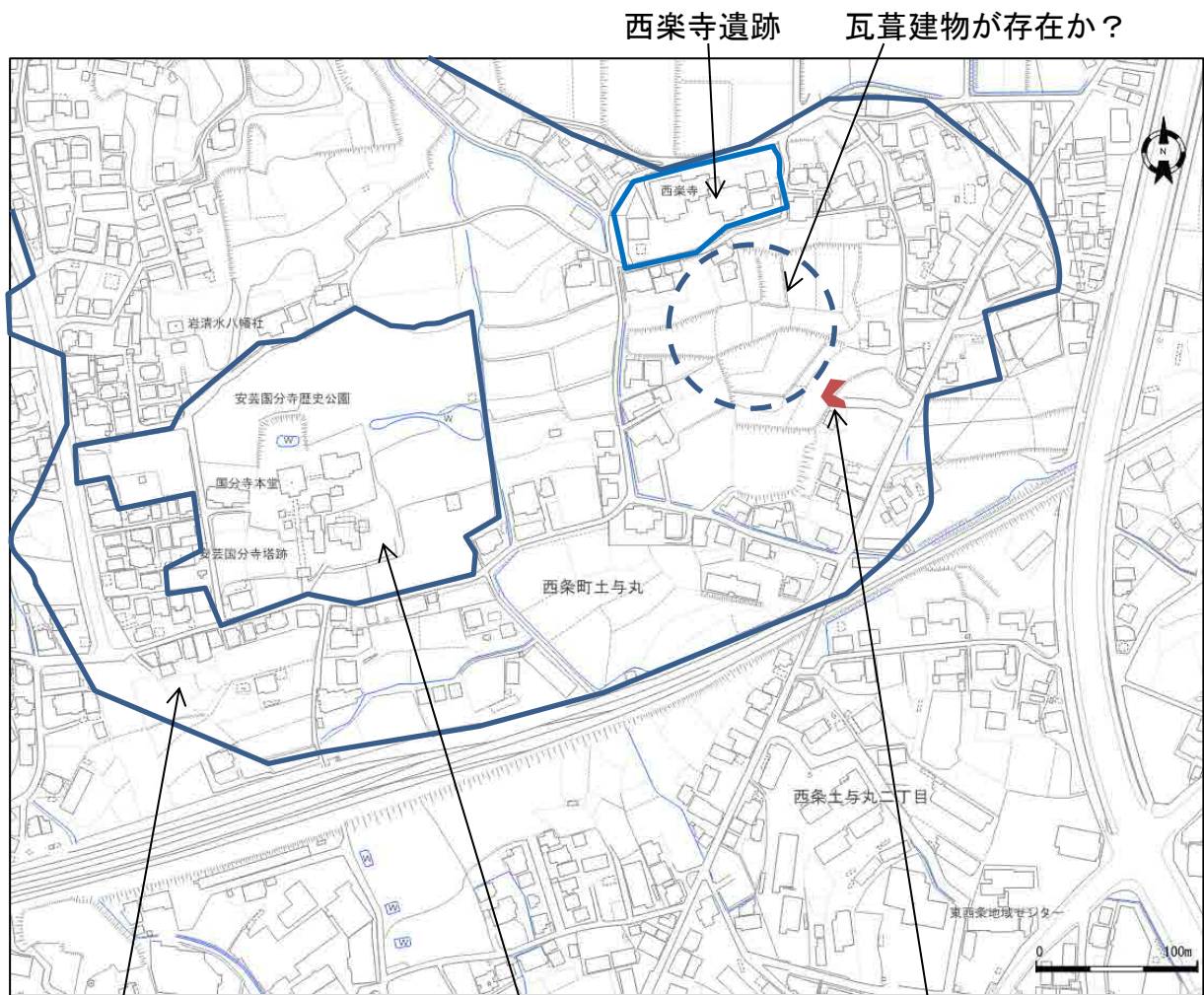
まとめ

今回の対象地域は尼寺の字名が残るとおり、安芸国分尼寺が近くにあったのではないかと想定されているエリアです。

発掘調査した結果は、水田造成により旧地形が削平されていたため、わずかに柱穴状のピット数点と溝状遺構、不整形な土坑が残るのみでした。溝状遺構は北半にL字状に残存しますが全容は復元できず、柱穴状ピットについても明確な建物配置は復元できませんでした。

しかしながら、遺物は布目瓦や須恵器の破片が出土したことから、奈良～平安時代頃の瓦葺建物が近くに存在していた可能性があります。いずれも小片で詳細な時期までは特定できませんが、尼寺の遺称地名にふさわしい遺物といえます。

また、現地は発掘調査した水田から北西へ向かって徐々に標高が上がり、調査範囲を見下ろす低丘陵上に西楽寺というお寺が建立されています。周辺の地形からみて、おそらく主要な遺構はこの西楽寺との間にある緩斜面に広がるものと考えられます。今後の近隣の発掘調査で安芸国分尼寺の発見が期待されます。



安芸国分寺周辺遺跡

史跡安芸国分寺跡

今回の発掘調査地点



計画地完掘状況（南から）

柱穴状ピット

L字に残る溝状遺構

西中郷遺跡の発掘調査

特定非営利活動法人 広島文化財センター 濱岡 大輔

調査日：2023年4月3日～25日

所在地：東広島市西条町田口字西中郷

調査面積：392.5 m²

調査原因：宅地造成工事

調査の概要

本調査区は、ほぼ中央付近 (X=-178384m) が土地の境界で、県道331号線に面した北側の土地は宅地で、南側の土地は水田でした。調査区南側の水田の下には、粗粒砂からシルトまで様々な粒度の砂が堆積していることから、西から東側へと流れる古河川による河川氾濫によって形成された土地であることが確認できました。

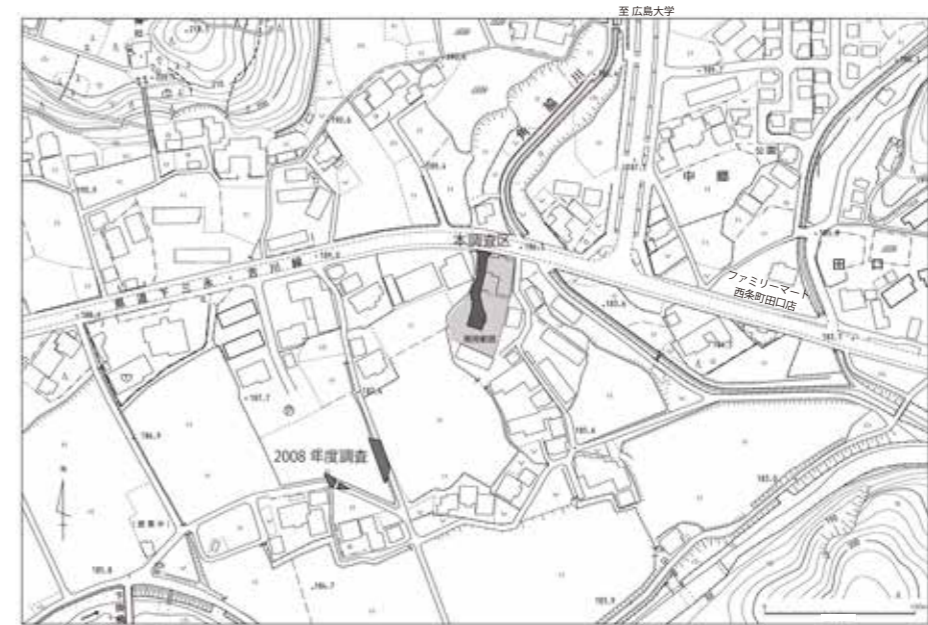
今回の調査では土坑4基、柵列1条、掘立柱建物跡2棟、溝状遺構2条、落ち込み状遺構3基、ピット(小穴)を検出しました。出土した遺物は、磁器皿、陶器碗、土師質土器甕・鍋・播鉢、須恵器・弥生土器の土器類や金属製品の簪(かんざし)があります。

調査区の南側で検出した、掘立柱建物跡(SB1・2)や柵列(SA1)、厠跡または肥溜めと考えられる土坑(SK1・2)は、出土遺物と配置から18世紀後半以降の農家の家屋とそれに附属する施設と考えられます。

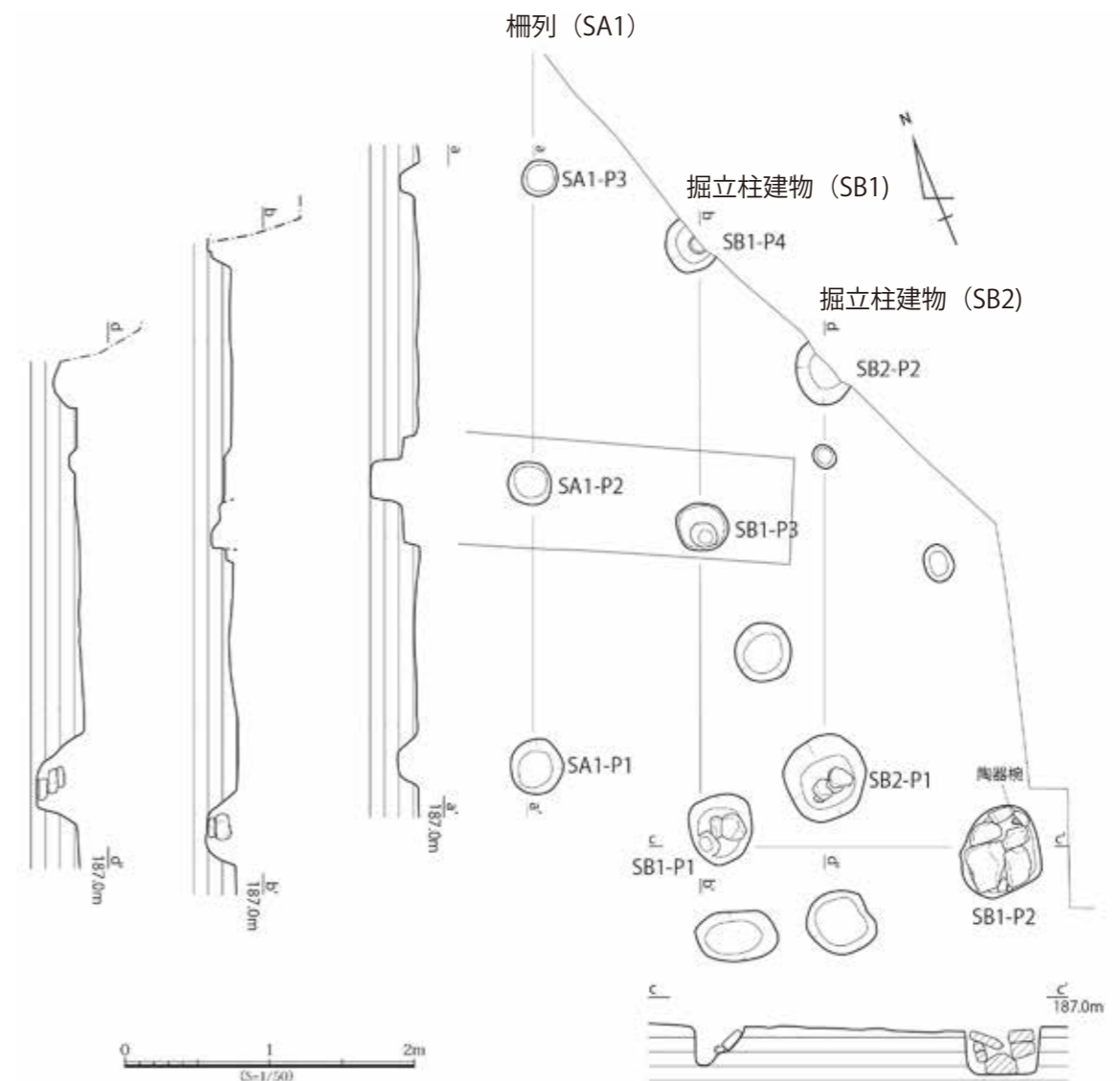
調査区中央で検出した溝(SD1～3)は、遺物が出土しなかったため時期は不明ですが、現在の宅地と水田の境界の下に位置していることから、近世においても南側に位置する宅地と耕作地を区画するための溝であったと考えられます。

過去の調査(2008年度の東広島市教育委員会・財団法人東広島市文化振興事業団による調査)では14世紀代の遺物が出土していたことから、本調査区においても中世の遺構が検出されることが期待されましたが、近世より古いと断定できる遺構を今回の調査では確認することはできませんでした。中世より古い遺物も数点ほど出土しましたが、いずれも包含層からの出土で、上流から流入したものと推測されます。

本調査の報告書『西中郷遺跡発掘調査報告書2』は令和5年7月31日に発行しております。市内の図書館等でご確認していただくと幸いです。



調査区位置図 (S=1/5,000)



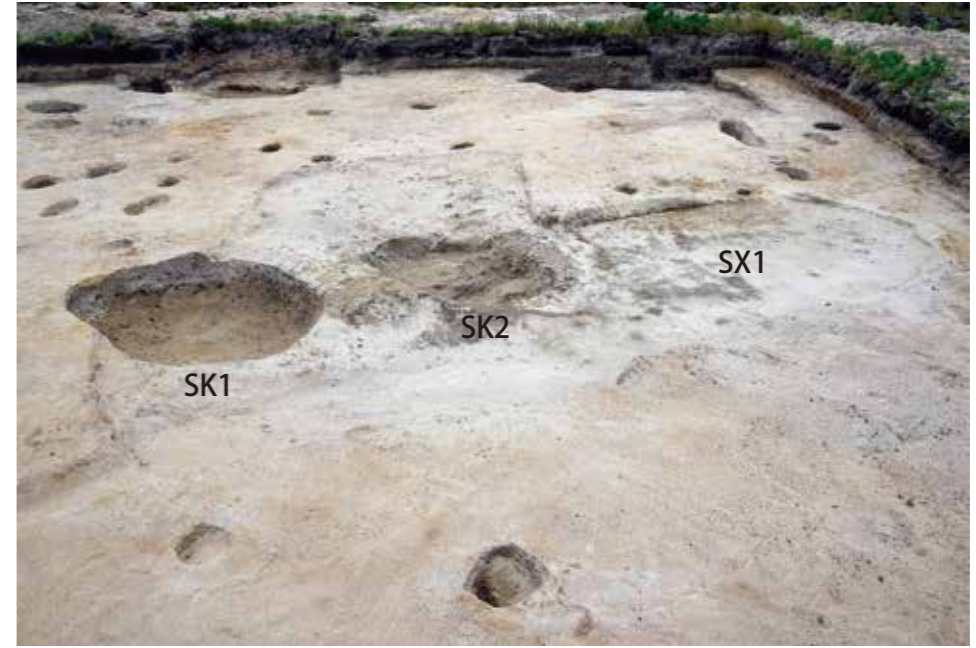
SA1・SB1・SB2 平面・断面図 (S=1/50)



遺構配置図



オルソ平面



厠または肥溜めと考えられる土坑 (SK1・2) (西から撮影)



磁器皿 (SX1 出土)



陶器碗 (掘立柱建物 SB1-P2 から出土)



簪
(土坑 SK1 北側の落ち込み状遺構 SX2 から出土)

令和5年度出土文化財報告会

令和5年度 四日市遺跡の発掘調査成果について—街路整備事業吉行泉線—

東広島市教育委員会生涯学習部文化課調査係
 (東広島市出土文化財管理センター) 佐武 壮太

- ・ 四日市遺跡

四日市遺跡は、JR西条駅南側に広がる遺跡で、古くから様々な時代の集落が営まれた場所ですが、その中でも遺跡名が示すとおり、江戸時代の主要道である西国街道（近世の山陽道）沿いに営まれた宿場町、「四日市宿」の町屋跡が主な遺構です。今回の計画地はその町屋跡が集中するエリアから南側へやや離れた場所を調査しました。

- ・ 調査の概要

発掘調査は令和5年5月～6月にかけて実施しました。調査の結果、下層（地山面）で作業小屋の可能性のある小ピット群が検出され、上層（近代面）では石列を検出し、元々田（農地）であった場所を近代になって埋め立てた造成の痕跡が確認されました。遺物としては須恵器、土師質土器、陶磁器、瓦など、主に近世から近代にかけての遺物が出土しています。

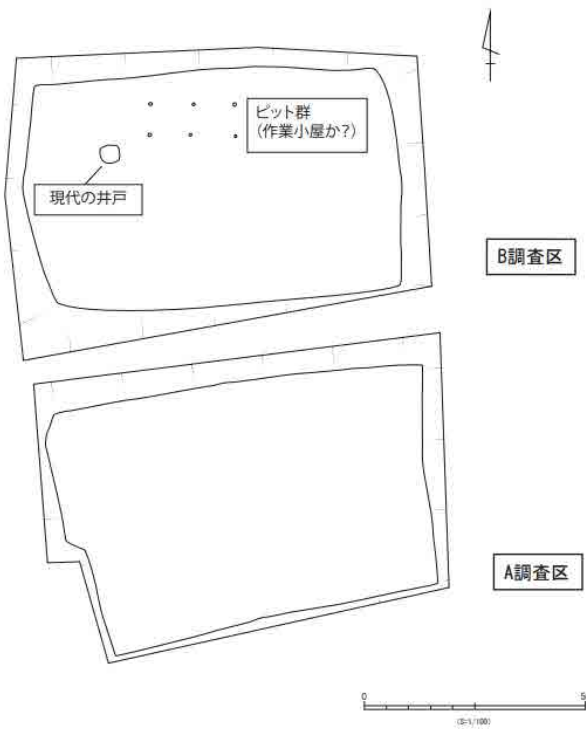


← 遺跡位置図

発掘調査範囲 →



調査区遺構配置図



① 四日市遺跡 A調査区

検出した遺構：石列

出土した遺物：須恵器、土師質土器、陶磁器、瓦、など

要約：近世を中心に栄えた四日市宿から南にやや離れた部分を調査しました。その結果、近代の遺構面から、石列が検出されました。当該地は、中世～近世には農地（田）であったと考えられ、近世の町屋跡に関する明確な遺構は確認されませんでした。現在の宅盤面は近代以降の造成で整地されたと考えられます。



A調査区完掘状況（下層面：南から）

② 四日市遺跡 B調査区

検出した遺構：石列・ピット群

出土した遺物：須恵器、土師質土器、陶磁器、瓦、など

要約：続けて上記調査範囲のすぐ北側部分を調査しました。その結果、下層（地山面）から小ピット群、上層（近代面）から石列が検出されました。当該地も、中世～近世には農地（田）であったと考えられ、近世の町屋跡に関する明確な遺構は確認されませんでした。こちらもやはり近代以降の造成でかさ上げされたと考えられます。



B調査区完掘状況（下層面：北から）